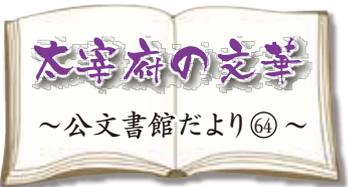


白村江戦と筑紫

白村江戦とは、663年8月、倭（日本）の水軍が唐の水軍と白村江（中国・朝鮮半島の記録では「白江」）で会戦し、大敗を喫した戦いをいいます。少しでも古代大宰府の歴史に関心を持つておられる人なら、一度は耳にしたことのある戦いでしょう。ふつうは、「白村江の戦い」と呼ばれていますが、森公章^{もりきみゆき}さんは、この戦いが日本の歴史書・日本書紀だけではなく、中国の旧唐書・新唐書、さらに朝鮮半島の歴史を記した三國史記にもみえるように、東アジア世界を巻き込んだ戦いであったことをふまえて、「国際研究の立場から『白村江戦』という呼び方を提唱されてお



ています。これより先の660年、新羅の要請をうけて行われた唐軍の攻撃により、百済の王都泗泚^{しじ}城が陥落、百済王をはじめとする王族、貴族たちが唐へと連行されます。倭王権は、百済にいた遺臣たちの願いをうけて、百済復興にのりだします。これがいわゆる百済救援戦争と呼ばれるもので、白村江戦はその最終段階に位置づけられるのです。

この敗戦は、倭王権にどのような影響を与えたのでしょうか。ここでは、筑紫に注目して考えてみましょう。

う。日本書紀によれば、敗戦翌年の天智天皇3（664）年、対馬島・吉岐島・筑紫国などに防人・烽^{かき}が置かれ、また水城が築造されたことが記されています。さらにその翌年には大野城・基肆城が築城されており、おそらくは後の令制大宰府がもっていたとされる軍事的な役割がこの時に与えられた可能性が大きいと思われるます。この時期の筑紫には筑紫大宰と筑紫総領という二つが併存していま

した。筑紫大宰はすでに推古朝から日本書紀にみえますが、これは書紀編者の創作的な役割を担う官職として新たに設置された、とする説があります。しかし、わたくしはそうは考えません。後の令制大宰府は、筑紫大宰や筑紫総領のもっていた、それぞれの役割をふまえながら段階的に整えられていったとみるべきだと考えるからです。たしかに、軍事的な役割を担ったのは筑紫大宰でしたが、これは白村江敗戦という事態に即応するための緊急的な措置であったとみられ、したがって天智朝にこの役割が与えられたことを、いったん相対化してみる視点が必要だと思えます。